

【異世界から】K4Tの世界旅行【荒らしに来ました】

宵影

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前回謎の技術で世界の狭間に投げ出された4人は異世界に迷い込む、その世界の技術は現代以上近未来チヨイ先程度の世界であった、その世界での準備期間として宇宙船で惑星と惑星を行き来する運び屋「カオス」に入社するそして4人は準備を始めるが

基本100面ダイスで振って出た目に従って物語が進行します

目次

20

R i m w o r l d

サクツと解説やつてくる面倒事

1

合流と悲劇

5

f r o s t p u n k

【悲報】ハードコア新天地

9

こんなことが想像できるか？俺は出来

ない

13

私が太陽になることだ

17

l o b b o t o m y c o r p o r a t i o

n

【すごい】新たな世界へ【やばい】

Rim world

サクツと解説やってくる面倒事

「世界の狭間」

「…暇すぎる」

何もやることの無い俺達は漂流物であるOWの改良型を作りながら暇を持て余していた

「なあ戦闘機、今こそ漂流物の食料で何とかなってるがさすがに暇すぎないか？」

「そうは言ってもだな適正Oこの漂流物がどっから来てるかわからないし、何より出口がいつ開くかわからないぞ」

事実この漂流物が何処から来ているかわからない以上、焦っても仕方無いことだ

「お、戦闘機、あれ見ろよ、多分出口だ」

「おお、まじかじゃあ閉じる前に行くか」

「どうやって行くの？」

「この改良型OWのマスブレードがあるだろ？これを足場に設置して、こうだ」

「えっちよっ」

「巫山戯んな!」

「イイイイイイイイイイヤツホオオオオオ!!」

その後普通に大地に突っ込む形で着陸^{墜落}した俺達は身分やら戸籍やらを偽装（犯罪）して宇宙間で運び屋をする企業に入社し、宙賊を回避しながら瞬く間に輸出や輸入を繰り返して、企業に貢献して行った…そして企業が大企業と呼べる物になって暫くすると…

上層部の要請で『新しく支部を作るから大量の建材と少しのレアメタルをこの惑星までお願い』と言われたので運んでいたらルート上に宙賊が待ち伏せしていたのだ、上層部が腐っていた時期に造られた宇宙船を使用して俺らには抵抗できるはずもなく…

「ああもう!?!何こいつら!?!しっこい!!」

「まさか輸送中に襲われるとはな」

「この宇宙船上層部が予算ケチったせいで武装なんも積んでないんだよな」

「うちの企業俺たちが入社した時は小企業だったけど今じゃ大企業だからな」

「つーかこいつらしっこくない!?!もう目的地過ぎちゃったんだだけ!?!」

「まあ多分別の部署の奴が俺らがレアメタル運んでんの宙賊に言ったんだろ」

「最近昇進した奴かな？この企業の資金源である俺らを宙賊に売ったの」

「このことバレたら彼奴クビどころかブラックリスト入りだな」

「そろそろこの宇宙船も限界だ!!全員脱出ポッドに緊急用必需品入れて脱出するぞ!」

「ういっす」

「武器持つてくか？」

「何ある？」

「狙撃銃2丁と猟銃一丁レールガン一丁にオーバードウェポン4つ」

「「「どうやって積んだ!」」」

「いやでもないよりマシだ!脱出ポッドに積んでしまえ!」

「あと積んでないの隊長だけだよ」

「急げ俺!お前ら先行つてて!後で合流な!」

「あーい」

「また後でなー」

「死ぬんじゃないぞー」

「隊長何処だー」

「あ、お前ら空見ろ空」

「お、あれか？隊長のOW見えるし」

「あの感じだと結構遠いな…よし、方角は確認したから必要なもの持って行くか」

合流と悲劇

ギリギリ脱出できた俺は予定とは全く別の方向へ落ちていた

「…だいたい違うところに落ちたな…あいつらは何処だ?」

場所は…山の上か? だいたい遠くまで見える…お、あのごつい人影はあいつらか?

「よし、そうと分かれば必要なもん持ってアイツらと合流するか」

――
暫くしてこつちに走ってきた3人と合流し、今後について会議を始めた。

「よし、じゃあここをキャンプ地とする」

「ものつそい急斜面なんだが」

「むしろ何でここで会議なんて始めるよ」

「視界が斜めに…」

自分もそう思う、なんで斜面で会議始めたんだろう俺

しかもキャンプ地にしてるし

「いやだって拠点建てようにも低い場所だと何かあったとき対処できないじゃん」

「だったらもう少し上に建てろぞ」

「幸い頂上に湧き水あるしな」

「そういうと思って確認してきた、喜べ直のみ可能だ」

「よし、じゃあ各自囲いを作るか、俺は北側作るからミロクは南お願い、西はクロト、東はムッツが担当ね」

「いまだ自分の名前に違和感しか感じない」

数時間後

「やっべ資材足りねえ」

「ちよつと目を離れたらなんでサグラダファミリア出来上がってんだよ」

道理で資材捕ってきても減るわけだよ

「あ、因みに張りぼて建築だからちよつとした衝撃で崩れるよ」
「」

@月；日ミロクの日記

遭難生活1日目

未開の地に着いたので記録を書くことにした

場所は不明、目的地のずっと向こうの地だ、そして今は少し高い丘の頂上に拠点を構えた、どうやらこの地は時間が長いことから銀河の外周部を回っているのだろう、それにしては温かいが

ミロク達からこの星の生命体の情報を少しだけだが入手できた

どうやらモツファロー？という毛深い牛がいるらしい、あとは背中に黄色いものを背負った爆発するネズミやそのほかこちらでも確認できた生物がいた

そして、現地人がいるらしく、であったときは襲われてしまったようだ、相手が悪すぎたな。

資源確保もかねて周囲の探索時には謎の建造物や遠くを徘徊する機械生命体が数体見えた

鉄や銅などの鉱石は文明レベルが低いのか潤沢に残っておりザクロが拠点内に穴を掘って採掘に行った

考えずに掘ったせいで何度か崩落にあつたらしいが特に問題はないようだ

就寝前に何か警報のようなものが聞こえたが拠点作りや探索などで疲れていたため
全員寝た

@月；日ザクロの日記

ミロクが記録をつけていたので自分もつけてみた

現在拠点にある資材は潤沢で特に鉱石が山のようにある

食料はクロトとミロクがとってきてくれたのでしばらくは大丈夫だろう

問題は拠点構築用の資材だ、ムッツがサグラダファミリアを建築したおかげでほぼ枯

渇状態だ

重要なことはミロクが書くだろうから今日はこのあたりで寝る

外が騒がしい

@月：日ミロクの日記

朝寒さで目が覚めたら氷河期だった

……なぜ？

あとザクロが人間やめてた

f r o s t p u n k

【悲報】ハードコア新天地

氷河期の場所にきて数日が過ぎた、

荷物はすべて人間をやめたザクロが持つてくれたおかげでこれといった苦労はないが寒すぎる

途中にいくつか都市があり、資源や食料などを物々交換したりしてあちこちを放浪していたら壊れて起動していないジェネレーターがあった、とれるものを取った後ザクロがジェネレーターを食べて熱を作り出せるようになり放浪するのが楽になった、やはり放浪していると遭難者によく出会う、彼らはどうやらアークという植物の入った施設を運び、ジェネレーターのある場所を探しているようだ、少し前に崖に囲まれた場所に使われていないジェネレーターがあったのを思い出しその場所にまで案内をした。

そこまで案内すると感謝された、饑別にスチームコアを10ほど渡したら驚かれたがいろんな場所を歩いていると結構拾うことがあるのでまだ在庫はある、

次に出会った集団はどうやらロンドンから来たようだ、もとは貴族たちに奴隷のよう

に使われていたが船を盗み逃げ出したそうだが、そしてこの集団はジェネレーターを探している最中に仲間とはぐれたらしい、ジェネレーターの場所は知っているが食料が持たないらしく助けを求めてきた、

見捨てて死なれても後味が悪いので少しの食料と資源を分けて近いところにある施設の場所を教えたら、喜んで向かっていった、さっきまでの死にかけの顔が嘘のようだ。今度は豪華な服を着た集団に出会った、向こうがこちらを見つけると数人こちらに近づいてきて食糧をよこせと命令してきた、

全員でザクロに乗って高速でその場を去った

暫くして最初に見つけたジェネレーターに着いた、しかし前のように人の気配がなく、死んだような印象がある

ジェネレーターが動いているので街の中に入り散策をすると完全に凍って凍死した人が沢山転がっていた

暫くして街の中心に着くとそこには生き延びた人たちが火を絶やさないと一生懸命石炭をジェネレーターに入れていた、そのうちの一人に何があったのか聞くとひどい寒波がやってきて碌な対策をしていなかった街は凍り食料も満足に食べられない状態が続き、自分たちしか生き残っていないと言ってきた。

その寒波は南からすさまじい勢いでやってきてすべてを凍らせて北の方へいったとのこと、そのことを他の街に伝えるために行きたいが、全員衰弱しきっていていける人がいないようだ

代わりに自分たちが伝えることを約束し彼らには悪いがそこその資源と食料を置きすぐに帰ることを伝えて近くのジェネレーターに向かった

道のりはひどいものだった、今まで出会った街が氷に閉ざされていたり、寒波の影響で地形が変わっていて遠回りを強いられたがアークの人たちや貴族から逃げていた人たちは寒波の影響を受けていなかった

そしてついに寒波を見つけた：

あれはもはや嵐だ巨大な雲が渦を巻きその場の地形を変えながら北へゆつくりと進んでいる、嵐を追い抜きその先にある最後のジェネレーターに向かうと、まだ嵐に気づいていないのか平和なものだ、しかし代表がそこまで有能ではないのかロンドナーズという組織がロンドンに帰ろうと言っているようだ、ロンドンはとくに氷に閉ざされたというのに

街に近づき代表に大規模の嵐が来ていることを伝え自分たちも準備を手伝うことを伝えるとすぐさま民たちに命令を出し、嵐に備える準備を始めた

さあ、自分たちもできることを始めよう

こんなことが想像できるか？俺は出来ない

「嵐まで約10日ある、それまでに食料、石炭、木材が必要だ……が正直この都市の備蓄と俺達が持ってきた資材で殆どクリアしている、だからこれから備えて更に資材を集めるぞ」

最後の都市に着いて嵐の事を伝えた後、俺達は住民達に伝えるべきことを伝え都市代表の指示に従って行動する事にした。

『じゃあ貴方達は木材の確保をお願いします、幸い貴方達が持ってきたスチームコアのおかげでオートマトンによる石炭採掘が自動化出来ましたので』

「了解、俺達にはコイツが居るから沢山持ってこれるぞ、他に何か欲しいものがあつたら言ってくれ」

『わかりました、ありがとうございます、自分は住民の不安を取り除くのでその間お願いします』

そう言って代表は住民の方へ行き、俺達は石炭を初めとした資源を確保しに向かった。

「よし、じゃあ皆ザクロにのって、その方が早い」

「了解」

「OK、よし、頼むぞザクロ」

☒ 納得いかないとかいうレベルじゃない☒

そう言うとかザクロはすぐさま走り出した

暫く走っていると工業地帯を見つけ、その中から大量の鉄と石炭、そしてスチームコアを拾った。

遠くを見ると南の方に既に嵐が見えているが、まだ大丈夫な距離だ

ふとザクロが急に別の方向を向き、その方を見ると白熊が居た、しかも3匹、普通の部隊なら全滅不可避だろう、だがこつちにはザクロがいる

「ザクロ、殺れ」

☒ 解体するよ☒

背中中のブースターを吹かし高速で白熊の横を通り過ぎると同時に切り裂き、3匹の白熊の体がズレるように裂けた。

「よっし、食料ゲット、ほーかーにーはー!?!?」

「ここら辺は特に何も無いらしいな、一回戻って別の準備しようか」

「そだな、…よしザクロGO」

☒ フオオオオ? (☒ | ☒) / オオオオオオオオオ!!! ☒

来た道を高速で戻っていくと、どういう訳か凄まじい速度で嵐が都市に迫っていた
「は？早くね？」

「あれだとぎりぎり間に合う位だな」

クロトの言う様にあの進行速度だと都市にたどり着いてすぐにでも嵐は来るだろう
「急げザクロ!!」

☒ …同族の匂い？いやでもアラガミにこんなことができるやついないはず…☒

「ミロク！嵐ん中になんか見えた！」

「すっごいデカイ！」

「なんかお前ら精神年齢下がった？」

クロトとムッツが嵐の中に何かいるといいだしたが…何もいない…っ!?

「あのシルエツト…クアドリガ？」

「え？クアドリガってこんなことできたっけ？」

「いやできないだろ、こんな寒い所にいるってことは寒冷地仕様だろ？でも強い攻撃つてトマホーク飛ばすし…か…」

都市に近づくに連れ、その巨大なクアドリガ墮天を見て思わず絶句した…

巨大に見えたのは大量のクアドリガ墮天がトマホークを発射しながら走るといふ光

景だったからだ

発射されたトマホークはすぐさま着弾し、氷の嵐を生み出してはクアドリガ墮天に巻き上げられ、より勢いを増して進行している

「よし誰か俺を殴れ、夢を見ているんだ、じやなきや先頭のクアドリガが後続のクアドリガのトマホークくらった瞬間最後尾で蘇るとか悪夢でしかない」

「安心しろ、現実だ」

「むしろ不安しかないんだよなあ」

「むう…：最悪を想定して行動していたがまさかアラガミがいるとは…：よしザクロはこのまま都市の方に、ムッツとクロトは俺と一緒にクアドリガを良くて進路変更、悪くて足止めな」

「普通逆じゃね?」

「あつ（察し）」

クロトは察したみたいだな、よし↑

俺達はザクロから降りてそれぞれのOWを構えた

「全員兵器は持ったな?行くぞ!!」

それぞれがOWを起動し迫り来る波に向かって突撃すると同時に意識は途切れた

私が太陽になることだ

ザクロが都市に着いた時、人々の悲痛な声が聞こえた。

やはりロンドンを離れるべきではなかった

ロンドンに帰っていればよかった

代表は一体何をしているんだ

負の感情が都市を包んでいて、今にも秩序が崩壊しそうだ。

だが、まだ終わったわけじゃない、自分だけが帰ってきた。

都市の人はこんな状況で迎えることなどできず、ただ帰ってきた自分に罵声を浴びせてきた

お前達が嵐を呼んだんだ

お前達が余計な事をしなければ平和だったのに

これから来る嵐にはジェネレーター1つでは足りない、だが自分は過去にジェネレーターを食べ、その身に覚えさせている。

これから訪れるのは極寒の時では無い。

今の身ではジェネレーターとしての役目は殆ど果たせない、ならばジェネレーターと

しての役目を果たせる身になれば良い。

肉体の変化は一瞬だ、黒い霧を纏い太陽をその身に宿せばいい。

私^施の名はラー^{ザク}ロ

先に行つた3人も知らない、新しいアラガミ。

これなら足りる、これだからこそ足りる

嵐が来た、だがアラガミの群れは来なかつた

あの3人は役目を果たした

なら私も役目を果たそう

その日、ひとつの都市が嵐に飲まれた、しかしその都市に闇は訪れなかつた。

不思議に思つた都市の住民が外へ出て空を見ると3つの太陽が浮かんでいた、

中心には太陽の上に座り傍らに太陽を浮かばせている鳥の頭を持つ人影^神が鎮座していた、その神々しい姿に住民は思わず祈りを捧げた。

そして住民が祈りを終わるとすぐさま家に戻りその手に仕事道具を持ち近隣の住民に「太陽の神が降臨した」と言つて回つた、その言葉にいくつかの家から住民が顔を出し空を見上げると、その空に浮く神の姿に感動し、祈りを捧げ始めた

しかし嵐は去らず、時間が過ぎる程その勢いを増していた。

そのことに気づかず、年の住民達はジェネレーターの周りに集まり祈りを捧げ続けた、そして嵐は更に勢いを増し、住民達が寒さを覚え始めた頃、2人の住民が獣と石炭を持って、その神に捧げ始めたのだ。

その事に気付いたのか神は傍らの太陽を黒く染めると、その太陽に大きな口が現れたのだ。

黒い太陽は、その大きな口で獣と石炭を喰らうと、神の側に戻ったと同時に、神に変化が現れた。

その身に纏う炎を周囲に撒き、その背中に炎の翼が現れた

そして最後の寒波、本来なら都市は闇に飲まれ更には -150°C の大寒波だが、太陽の神によって都市は真昼のように明るく外に出ても誰も凍えないという奇跡が起きている

暫くして夜が開け、嵐が過ぎ去ると同時に太陽の神の姿が薄れ始めた、その影響か温度が少しづつ下がりはじめ、周囲に冷たい風が吹き始めた、しかしそれでも住民達は祈るのをやめず、神の姿が消えるまで祈り続けた

lobotomy corporation

【すごい】新たな世界へ【やばい】

～1日目～

この世界に着いてやる事は情報の改竄だった（犯罪）

それにより自分達4人の戸籍を作り換金した金で住居と食料を得て、ムッツとザクロで情報収集、クロトと自分で生活の基盤を整えていた所、ムッツからこの世界がとても残酷だという情報が届き、現在全員で新居に集まりこの世界の事を話している

「じゃあ、記念すべき第一回目の会議だ、ついさつきムッツがこの世界の事を残酷と言っていたがそれは何故だ？」

「この世界に気づいたのはそこら辺のもの食って腹を壊したからコンビニにトイレを借りに行った時に見つけた社員募集のポスターを見た時だ」

「そうか、で？間に合ったか？」

「間に合わなかった」

「そうか…」

そう言うくとクロトはムッツから少し距離を置いた

「それで？この世界は一体なんだ？」

「なんでこんな硬いんだこれ…ああ、ロボトミーコーポレーションだ」

「なん…だと…？」

「よりによつてそこか…」

「ロボトミーか…すぐ死なないようしないとだな…よし、まだ募集枠残ってるから全員分募集送つとした、明日面接らしいから荷物まとめるぞ、寮生活になるかもしれない」

「俺らに拒否権無いか…」

「遺書書いところかな、宛先無いけど」

「俺もじいさん宛に遺書書いところかな、じいさんこの世界にいないけど」

そい言うつてクロトとザクロは遺書を描きに自室に戻つて行つた

「なあミロク、枠あるつて言つてたけど、あそこ毎日凄い人数応募してるはずだぞ？」

「ああ、それなら4人分の募集ラインを俺らに書き換えた」

「アンジェラにバレるだろそれ…」

「人死んでシャンパン開けるようなAIなんぞに遅れをとる訳が無い」

「そう言えばお前最初人工AIだったな…」

「忘れてたの…？まあ今日は後にやることないし解散だ解散、ザクロとクロトに言つと

いして」

「了解」

く2日目く

特にやることも無く、ロボットミーコーポレーション本社に着いた自分達は面接官の前で入社理由を言い、短めの動画を見せられた後書類に判子を押し、与えられた部屋に入った

「…」

「…」

「…面接官…アンジエラだったな…」

「…言うな」

「…終始若干目開けてたな」

「…言うなと言っているだろう」

「あれ怒ってるらしいぞ」

「言うなって言ってるんじゃない?」

「誰だったかなー? 昨日人死んでシャンパン開けるやつにバレるわけがないって言ったのはー?」

「おま、お前ふざげんな!?!面接官がアンジエラとかお前予想つくか普通!?!」

「あれ完全にお前見てただろ! つまり情報改竄したのお前だって完全にバレてんじゃない」

か?!入社できたからいいものの俺ら何処に配属されるのかわかるか?!」

「十中八九懲戒チームだろうな!管理人優秀じゃなかったら休みないぞ俺ら」

「懲戒チームとか実質死刑室だろこれ」

「つーか忘れてたけどこの世界来て貰った能力なんだろうな」

自分とムッツが言い合っているとザクロが能力のことを思い出した

「能力なら見ようと思えば見れるはずだぞ?」

「いやどうやって?」

「いやだからこんな感じに:」【ステータスオープン】

手のひらをを前出して唱えると、目の前に自身の能力を数値化したウィンドウのよう
なものが現れた

名前:ミロク

力:120

守:200

速:250

知:20

RED:耐性0.2

WHITE:耐性0.2

BLACK：耐性0.2

PALE：免疫0.0

能：次元移動・能力付与・アップノーマリテイ部隊装置

「こんな感じだな」

「知の部分低すぎて脳筋かと思っただわ」

「この世界だどどのくらい？」

「ステの最大値255だから速はほぼMAXだな」

「へえ…じゃあ【ステータスオープン】」

名前：ザクロ

力：150

守：190

速：170

知：2000

RED：耐性5.0

WHITE：脆弱5.0

BLACK：免疫0.0

PALE：吸収2.0

能：アラガミ・アブノーマリテイ
シルモノ。

「さつきステ限255聞いたばっかりなのにすでに天元突破してんだけど」

「きつと能力のアラガミだろ【知】って言っても覚えやすさとかそんなだし」

「つまり最初の一言でほしい全部把握できるといふことか」

「すげーな、じゃあ次俺ね【ステータスオープン】」

名前：ムッツ

力：230

守：200

速：210

知：240

RED：脆弱5・0

WHITE：耐性0・2

BLACK：吸収2・0

PALE：免疫0・0

能：万能・アブノーマリテイ
ウツモノ。

「全体的に高いな」

「これも能力の影響だろうな、万能だし」

「つーかうツモノってなんだ、射撃系か？」

「いいねえ、じゃあ最後俺ね【ステータスオープン】」

名前：クロト

力：255

守：255

速：120

知：250

RED：吸収2.0（耐性0.1）

WHITE：吸収2.0（耐性0.1）

BLACK：脆弱5.0

PALE：免疫0.0

能：武人・アブノーマリティマモルモノ

「速度除けば最高だな」

「能力的に盾役だな」

「いうことないからって適当に感想いうのって結構ひどいと思うんだ、というかザクロは黙ってるんだ」

「いやさ、能力のところはルビが見えるんだよ」

「ルビ？なんも見えないが？」

「能力の関係で見えないものも見えるとか？」

「まあいいだろ、特に問題ないし」

全員のステータスを確認し終わり暫く話していると、部屋の扉から誰かが入ってきた

「ん？誰だ？」

「えつと…職員のリョシアと言います」

「リョシアさんか、いい名前だ」

「ありがとうございます」

「それえでリョシアさん、何しにこの部屋に？」

「えーつと…新しく入ったと聞きました、これ先輩から贈り物です」

「入社祝いあるのか…すごいな」

「はい、新しく入った職員の方が頑張れるように、と」

「ほう…貰いつばなしというのもあれだしお返しにこれあげるよ」

「!!いいんですか!!」

「?…ああ、かまわないが？」

「ありがとうございます！」

「お、おう、どういたしまして」

「では失礼しますね！」

「おう、がんばれよ……？」

そういつてジョシユアと名乗った職員は部屋から早足で出て行った

「何だったんだ」

「急に元気になつたな」

「どうかクロトお前贈り物どつから出したよ？」

「ん？ああそういえば、どつから出したんだ俺……何か渡そうと思つたらすでに手に持つてたからわからなかつた……」

「それ以前に先輩に対してため口とかお前それでも社会人か」

「あ、やつべ上司だったころの癖でつい」

「まあ過ぎたことだからいいじゃん、向こうも気にしてなさそうだし」

「それもそうか、じゃあ次俺対応するわ」

クロトがそう言うとともに扉の前に移動したその時、警報らしき音が鳴った

「うるせえ！」

「おお、なんだなんだ」

「収容違反だなクラスなんだろ」

「それまズくない？……ん？なんかジョシユアさん死にかけてる気がする」

「それこそなんだ？第六感とかそういう？」

「これたぶん渡したもものから来てるな、あれはいい人だ、助けなければ」

「おっ？誰助けるの？」

「さつき来たジョシユアさん」

「能力の方も知りたいしな、全員で行こうや」

「それもそうだな、よしじゃあ【繋げ、鍵の弾丸】」

ムッツが手を銃の形にして能力を使うと、鍵の形をした弾丸が放たれ扉を穿つと、扉が勝手に開き、そこには今にも死にそうな女性職員、ジョシユアがいた

「お、これはいいな」

「んなことより、死にかけてんじゃん、いそげいそげ」

「あの黒団子どうする？」

「ムッツ、GO」

「あいさー、うるせえ!?!あでも気持ちいい」

「Mかよ」

死にかけのジョシユアをクロトが回収し、代わりにムッツが部屋を出て3つの状態の笑う死体の山黒団子の前に立ち手を銃のように構えながら前に出た

「これでもくらえ!【穿て、棘の弾丸】」

そう唱えると、今度は棘の形をした弾丸が放たれ黒団子に突き刺さった、

「あれ？効いてる？効いてない？じゃあこれ【貫け、釘の弾丸】」

「反応無いから効いてるかわからんな」

「やかまし、ジョシユアさんの治療終わったんなら手伝えつての」

「はいはいザクロ!!クロト!!いくよ!」

「了解」

「じゃあまず俺の能力から【命ず、マモルモノは前にウツモノは後ろへ、シルモノは対象の情報を開示せよ】」

「了解!!」

ミロクが能力を使うと同時にザクロたちの行動が強制され、クロトが前に出て笑う死体の山の攻撃を受け、ムツツは後ろへ下がり指先から連続して釘を発射し、ザクロは笑う死体の山の懐に飛び込みその体を少し削ることで情報を得てそれを他の三人へ伝えた

「情報の開示、対象、名は笑う死体の山、弱点はRED属性、攻撃属性はBLACKになる」

「情報を受領、命令の変更【命ず、ウツモノは前に出て笑う死体の山の攻撃を優先して受けよ、マモルモノは能力を使い受けた傷を癒せ】」

「ウツモノ了解!! 【貫け、釘の連弾】」

「マモルモノ了解【受けよ、変わり身の盾】」

シルモノから得た情報に合わせて能力を発動すると、ムッツが前にそしてクロトが笑う死体の山の後ろへ回り込み持ち右手に棘のついた盾を取り付けた

そしてダメージを与え続けていると、笑う死体の山の頭の数が3つから2つそして1つになると、ムッツがダメージを受け始めた

「痛い?!!」

「情報の変動、ダメージ属性BLACKからREDへ」

「命ず【ウツモノは後ろへ、マモルモノは前へ、シルモノは退路を塞げ】」

「ウツモノ、了解」

「マモルモノ、了解【不壊の盾よ、我を守れ】」

「シルモノ、了解扉のロックを始める」

再度能力を使い、ムッツを後ろに下げクロトを前に出し、ザクロに廊下の扉の鍵を閉めてもらった

そしてしばらくすると予想通り笑う死体の山が逃げ出すが、扉が開かずそのまま逃げることもできずにクロトによって再収用された

「部隊装置【解除】」

「…お、自分で体動かせる」

「能力使用時の言葉が痛すぎてつらい」

「俺最後扉の鍵閉めただけ…」

「まあいいじゃん、部屋戻るか？」

「そうだ『収容違反だ!?!レベルV職員を呼べ!?!』…ミロク」

「言うな」

「悲報、俺らアブノーマリテイ」

「まあそんな気はしてた」